

# 日本漢方協会通信 28年 2月

## 紹介 月刊『漢方の臨床』第63巻・第1号

昭和9年に日本漢方医学会より、『漢方と漢薬』が出され12年通巻125号まで続いた。昭和25年に東洋医学会が発足し、漢方の医療への復権への態勢ができた。昭和29年に漢方医学の研究発表機関として、何れにもかたやらない雑誌を持ちたいと同数名が発起して『漢方の臨床』が発刊された。(以上、創刊号より要約)

ここに今月号の内容を紹介する。①表紙に書かれている目次 ②新年の言葉より、今井会長・中村理事・八木学術委員 ③熊井学術委員の「無門塾治験雑録・薬草園ようこそ」の初めの1頁を紹介いたします。漢方の臨床は年会費1万円で郵送されてきます。申込先は東亜医学協会 TEL: 03-3264-8410

### ①漢方の臨床・目次

【主な内容】	
平成28年(2016) 新年のこころ	9
【口絵】 目でみる漢方史料館(329) 神農・張仲景・銀乙三輔射…小曾戸 洋	2
月経に随伴する再発性外陰部湿疹に漢方治療が奏効した一例 清水正彦 他	103
瘧子降気湯により改善した痔疾の1経験例 阿南栄一朗 他	108
頭痛を認めない繰り返すめまい発作に呉茱萸湯が奏効した1例 森谷 圭二	111
飯塚病院 月曜カンファレンス 臨床経験報告会より④ 前田ひろみ 他	115
北里東医診療録から(143) 星野卓之 他	121
東洋堂経験余話(274) 松本 一男	129
漢方牛歩録(329) 中村 謙介	126
漢方研究室(30) 2016年1月号出題 第30問 中島 正光	132
無門塾治験雑録(62) 熊井啓子 他	149
アイヌ民族の生薬と東洋医学(3) 北方の生薬群 田中耕一郎	134
辰砂を求めて 濱口 昭宏	143
和田東郭の「黨参雑話」を読む(54) 松本 本草経験年表(3) 真柳 誠	159
日本における仲景医書関連年表(付・神農本草経験年表(3)) 真柳 誠	177
陶弘景と「養性延命録」(3) 吉元 昭治	171
リアル傷寒論(44) 齊藤 謙一	165
中医漢大留学日記(3) 藤 貴生	186
韓国韓医学通信(第69号) 金 成俊	188

### ②新年の言葉

いまい漢方薬局 今井 淳

明けましておめでとうございます。

昨年はいろいろお世話になりました。

10月に行われた漢方治療研究会では「葛根湯の油性成分の肩こりの効果」を発表する機会をお与えいただき、またこれを論文化しましたところ、貴誌に採用いただきました。感謝申し上げます。

漢方薬の多く(約90%)は煎じて用いるように古典に記され『傷寒論』にも「煮て滓を去り」とあります。貴重な生薬を水で煎じただけでその水溶液を服用するが、その残渣は滓として廃棄されています。しかしこの煎じ滓には水に溶出できなかった油性成分が残っている可能性が高いのです。漢方薬を煎じるとき、アロマと呼ばれる揮発性成分は水蒸気とともに大気中に飛散し、油性成分は滓の残渣に残りますが廃棄しています。これは貴重な資源の損失であるといえます。たとえば、おでんで煮込んだ汁だけ飲んで、具の大根、たまご、コンニャク、薩摩揚げなどを滓として捨ててしまうのと同じでしょう。滓として捨てている部分には油性成分が多分に含まれます。これを有効活用したいと考えました。煎じ滓をゴマ油など植物油に浸漬すると容易に油性成分が抽出できます。葛根湯の煎じ滓にゴマ油を加え浸漬させ首肩こりに塗布したところ、こりが軽くなり有効でした。これを漢方薬の油剤として、外用薬、経口剤などの新しい剤形として開発したいと考えます。全ての漢方薬が有効なのか、有効成分がどのように移行しているのか、その薬理・毒性は臨床効果はあるのか、多くの課題がありますが、今後の新たな漢方薬の展開ができるのではないかと夢を膨らませていきます。

新年も貴社及び会員の皆様のご健康と多幸をお祈り申し上げます。

日本漢方協会 理事 学術委員 中村 茂代

新年おめでとうございます。

昨年12月13日(日)慶應義塾大学薬学部芝共立キャンパスにおいて「第35回日本漢方協会学術大会」が「香り」をテーマに開催されました。日本漢方協会は薬系を中心とした研究会で、学術大会も年間受講の一環ですが、今回は例年になく当日のみの参加者も多く、来場者は200名を超す大盛況でした。

特別講演は、「漢方薬と香り」指田豊先生(東京薬科大学名誉教授)、「漢方生薬栽培の現状」御影雅幸先生(東京農業大学教授)、一般発表・分科会発表は「傷寒論方剤中の香りある生薬」「食(薬膳)における香りの効果」「香りが奏功したと思われる麝香正気散の症例3例」など香りに関する演題を中心にメーカーの最新情報などバラエティに富んだ発表内容でした。医系講師団の先生からも薬系ならではの発表で大変興味深かったのとお褒めいただき感謝いたします。

昨年は、2006年6年制課程がスタートして丁度10年です。6年制薬学部を卒業した薬剤師達が、社会に出て活躍をはじめ、漢方薬の有効性・重要性を再認識したということではないでしょうか。

今年も益々漢方界にとって良い年でありませう、心からお祈り申し上げます。

日本漢方協会 いまい漢方薬局 八木多佳子

新年明けましておめでとうございます。

昨年度は、薬局製剤に関する勉強会および実習のお手伝いをさせていただき、参加された薬剤師から「薬局製剤について」の現状を聞くことができました。全ての薬剤師は、薬局製剤に興味があり行ってみたいと思っています。しかし現実に薬局製剤を行っている薬局は、ごく少数に限られています。その原因のひとつは、製造技術や製造装置が広く普及されていない事にあります。しかし、もっと大きな原因があることに気付きました。それは薬剤師が「剤を調う=調剤」に多くの時間を費やし、「剤を製する=製剤」の時間がないこと、さらに「薬局製剤」をもって地域住民の健康に貢献できることの認識が薄いためと考えます。

平成26年1月に日本医療薬学会は『薬局の求められる機能とあるべき姿』を公表しました。そこに、セルフメディケーションの推進が挙げられています。その重要な手段のひとつが薬局製剤です。薬局製剤の品目数は昨年3月に新たに37品目追加され、430品目となりました。その中に漢方薬局製剤は236品目あり、薬剤師はこれらの優れた効果をもつ漢方処方薬を製造することができるのです。これらの製造方法の技術を確立し、普及していきたいと思っております。このため3年前に薬局製剤学会を設立するお手伝いをしました。この薬局製剤を活用し、心を込めたマイブランドの製剤をつくることは、患者さんとのコミュニケーションが得られると共に信頼性を高める手段とすることができます。一人でも多くの患者さんを癒し救えるかかりつけ薬剤師になりたいと思っております。

③熊井学術委員の「無門塾治験雑録・薬草園ようこそ」の記事は、2ページ(裏面)に一部をご紹介します。

無門塾治験雑録(62)

薬草園へようこそ〜秋から春〜

(抜粋)

〇) 熊井啓子・②) 山下耕司・③) 斉藤明美・④) 北川 寛  
⑤) 飯田敏雄・⑥) 小倉才子・⑦) 田中まち子

前回6月号に続き、今回は秋から春の東京都薬用植物園  
(所在地：小平市 栽培植物数：約1700種類 総面積：3  
1,398㎡)のご案内をいたします。

東京都薬用植物園ご案内

晩秋の青く澄んだ空に、高さ3〜4mにもなる皇帝ダリア  
(別名木立ダリア・写真①)がよく似合います。薬草園中  
央にある皇帝ダリアは、直径約20cmのピンク色の大輪の花  
を茎上につけます。空にそびえ立つ姿は圧巻で、来園者も  
見上げるようにして写真を撮っています。漢方薬原料植物  
区にサラシナショウマ *Cimicifuga simplex* (キンポウゲ科サ  
ラシナショウマ属) が植栽されています。  
サラシナショウマは北海道から九州・中国・朝鮮半島



写真① 皇帝ダリア

シベリアにかけて分布し、平地から高山まで木陰ばかりでなく、日の当たる所にも見られる分布範囲の広い大型の多年草です。和名の晒菜は春先のまだ花茎の伸びない若葉をゆで、水にさらして食べたことからつけられました。

8月では硬く青い蕾だった花が、10月〜11月頃になると1m位の茎頂に沢山の白色の花がブラシのように穂状に開花します(写真②)。

両生花と雄花があり、写真③は雄花で、1個の花をよく見ると多数の雄しべと中央の先の曲がった3個の花弁と、